

## 自由論題セッション A 報告要旨

【司会】平田雅己（名古屋市立大学）

### 【報告】

奥広啓太（東京大学大学院博士課程）「国家非常時における大統領・議会関係  
－第 77 議会第 1 会期（1941 年）を中心に－」

藤原郁郎（大阪大学外国語学部）「中東大規模油田の発見とアメリカ外交政策  
－オスマン帝国の解体から戦後レジームの形成まで－」

阿部博子（東北大学大学院博士後期課程）「喪の共同体－ベトナム・ベテランズ・メモリアルをめぐる記憶のポリテクス－」

西住祐亮（中央大学大学院博士後期課程）「米国現実主義者の再検討－コソヴォ紛争を事例に－」

奥広氏の報告は、第 77 議会第 1 会期（1941 年）の大統領・議会関係を事例に、米外交の歴史においてしばしば問題視される国家非常時の大統領権限拡大の要因について実証的に考察した。日本の真珠湾攻撃を契機に米国内に挙国一致の総力戦体制が築かれたとする従来の解釈に疑義を唱え、武器貸与法や兵役延長法など、外交・軍事関連法案の審議過程の分析を通じ、真珠湾攻撃以前にすでに政治的な「準戦時体制」が形成されていたことが指摘された。質疑応答では、上下両院それぞれの議論、有権者の反応、ウォーターゲート事件以降の議会改革をめぐる評価、議会の主導権の限界等について議論が交わされた。

藤原氏の報告は、第二次世界大戦後に確立する米国の中東石油政策の起源を 1940 年代初頭の戦時外交に求め、国内の石油枯渇問題をめぐる議論を背景に、政府が本格的な中東利権の獲得に乗り出す過程について考察した。1944 年と 1945 年の英米石油協定締結の背景に米国内の石油産業と関係が深い議員の働きかけがあったこと、また 1944 年の下院報告書（デコライヤー報告）を契機に、米国の石油権益の矛先がイランからサウジアラビアへと大きく転換したことが指摘された。質疑応答では、米国の中東政策の「緩衝」性や英米石油協定の性格等について議論が交わされた。

阿部氏の報告は、ベトナム戦争の記憶をめぐる近年の学術論争を踏まえた上で、ベトナム・ベテランズ・メモリアルの歴史的な性格について再検証した。心理学者フロイトの概念を援用しながら、帰還兵のジャン・スクラグズなど建立に携わった関係者たちの証言内容を分析した結果、先行研究の解釈とは異なる、「喪の共同体」として特徴づけられるメモリアルの内在的政治性が浮き彫りにされた。質疑応答では、メモリアル言説に見られる国家の論理や日本の靖国神社との違い、またこの追悼施設が「ウォー」メモリアルではなく「ヴェテランズ」メモリアルであることの意味合い等について議論が交わされた。

西住氏の報告は、コソヴォ紛争（1999 年）をめぐる米国内の論争を事例に、

米外交における「現実主義」思想の再検討を行った。政界における代表的「現実主義者」であるキッシンジャー元国務長官やスコウクロフト元 NSC 補佐官らの主張を検証した結果、一般的な「現実主義」者イメージと異なり、彼らによる国益の定義が必ずしも狭いものではなく、また彼らが米国の軍事力を過小評価していない実態が明らかになった。質疑応答では、現在のイラク戦争をめぐる現実主義論のあり方、現実主義の質的変容を促した冷戦終結のインパクト、ネオコンとの関係性等について議論が交わされた。

終始、平均して 20 名ほどのオーディエンスが集い、自由闊達な意見交換が行われた。

(平田雅巳)